第123回　日文研フォーラム

■

鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち

Japan Sailors in Russia in Edo Period

■

ヴラディスラブ　ニカノロヴィッチ　ゴレグリャード
Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター
所長　河合　隼雄

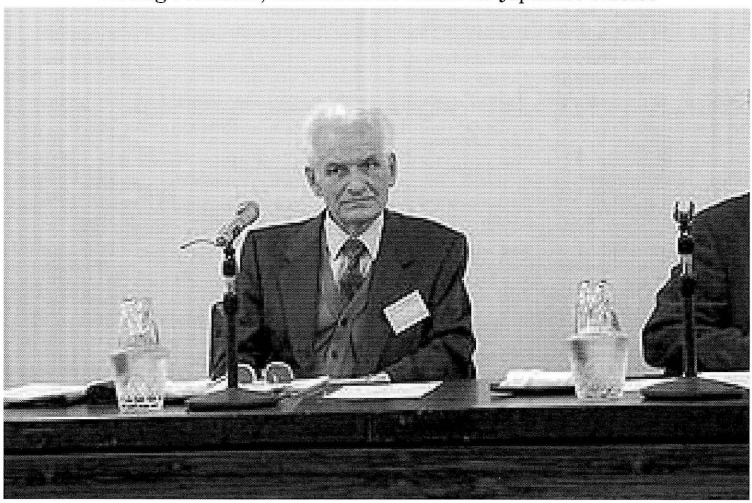
● テーマ ●

鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち

Japan Sailors in Russia in Edo Period

● 発表者 ●

ヴラディスラブ　ニカノロヴィッチ　ゴレグリャード
Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD
ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部極東部長
国際日本文化研究センター　客員教授
Chairman, Sanct-Petersburg Branch, Dep.of Far East,
Inst.of Oriental Studies, Russian Academy of Sciences
Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



1999年11月16日（火）

発表者紹介

ヴラディスラブ　ニカノロヴィッチ　ゴレグリャード
Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD
ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部極東部長
Chairman, Sanct-Petersburg Branch, Dep.of Far East,
Inst.of Oriental Studies, Russian Academy of Sciences
国際日本文化研究センター　客員教授
Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

1975年２月　日本言語、日本文学博士（レニングラード国立大学、ロシア）
1975年～　レニングラード〔サンクトペテルブルグ〕大学日本語･日本文学教授
1982年11月～　ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部
極東部長
レニングラード国立大学日本語科長
1986年11月　山片蟠桃賞受賞
1997年４月　旭勲章受章

主な著書・翻訳
1963～1971年　日本写本・木版本・古活字本の目録、６撒（共著）、
モスクワ、「ナウカ」（ロシア語）。
1970年　『兼好法師著「徒然草」』（序、ロシア語翻訳、解説）、
モスクワ、「ナウカ」、255頁。
1975年　『10～13世紀日本文学における日記・随筆』、
モスクワ、「ナウカ」、380頁。
1983年　『紀貫之』、モスクワ、「ナウカ」、143頁。
1990年　『８～16世紀日本文学史』、
サンクトペテルブルグ東洋学センター、400頁。
1994年　『かげろう日記』、（序、ロシア語翻訳、解説）、
サンクトペテルブルグ東洋学センター、347頁。
1999年　『保元物語』、（序、ロシア語翻訳、解説）、174頁。

一．はじめに

最近、日ロ関係はおもに政治経済問題が論じられています。しかし、私たちにとって人間の個人的・文化的関係は重要です。

民族交流関係はまず第一に文化の出会いの意味をもっているのは明らかです。この意味で古代日本も例外ではありません。奈良時代以前の神話に現れた天之御中主尊（あめのみなかぬしのみこと）・仏教と道教の思想は中央アジア・天竺・中国など古代文化交流の実なのです。

正倉院の宝物に代表されているように古代・中古日本において国際的な文化交流は盛んでした。

> 奈良時代以来存続する校倉造りの建物に、当時の国際色豊かな宮廷文化の様子を物語る数多くの品々が伝えられている。これらの品々は正倉院宝物と呼ばれ、天平文化の余香を伝える高貴な宝物群として世界的にも広く知られている。[1]

一九六〇年に上海大学の調査団はアジアに伝わる説話を調べ、「平安初期の物語『竹取物語』はチベットに伝わる物語と類似している」と報告しています。形式も内容もほとんどおなじです。

ヨーロッパ人が初めて日本を知ることになったのはマルコ・ポーロが口述した『東方見聞録』（一二九八年）です。マルコ・ポーロは日本にきたことはありません。長年滞在した中国で日本の情報に接し「黄金に輝いている宝島、ジパング」伝説をヨーロッパに広めました。一五四三年、ポルトガル人はヨーロッパ人としては初めて種子島に到来しました。一五四九年八月十五日、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に到着しました。日本にキリスト教の世紀が始まったのです。

その当時ヨーロッパ人はイエズス会等の宣教師たちを通じて、キリスト教だけでなく古代ギリシア・ローマの文学作品を含むヨーロッパ文化を日本に持ち込みました。この事実は日欧文化の出会いの一つの出来事になりました。国際貿易をしているロシアの事もあきらかになりました。大槻玄沢（一七五七―一八二七）は次のように書いています。

我国にて「オロシヤ」といふ名は、近き安永、天明の頃よりして、地はいづれの方角といふ事は弁へねども、人々口にする事なりしが、これは百五十年も百年も以前よりいふ「ムスコビヤ」の事なり…この国、皮革に名あり、蛮舶、この土産を国に齎し来り、その産を以て賈人皮の名とす…このムスコビヤは、もと都府の名にして、全州の総名となるとぞ、惣洲の本名はリュシア又ヲロシーア、又オロシイスコイとも云ふよし。[2]

江戸時代の初めに、幕府の鎖国令によって日本の国際交流はとだえ、遠洋航海用の船をつくる事を止め、船は太平洋に航海する事がほとんど出来なくなりました。

二、日本に関する最初の記録

日本がロシアの地図にはじめて登場するのは、一六五五年から一六六七年にかけて編集された『世界図』（Козмография）（オランダの地理学者メルカトール Mercator の『地図帖』（一五六九年）を見本とした作品）です。[3] 地図としては粗末でしたが、この図に示されたヤパンは、日本への関心を深めていく契機となり

ました。地図以外に「イアポニア即ちヤポン島」の章が日本の気候、自然、人民の宗教、国政などの事を含んでいます。「日本人は頭の回転が速く…性質は無慈悲です」と。

モルダヴィア生まれのギリシア人、当時のロシア使節局の通訳官、ニコライ・スパファーリイ（Николай Спафарий）は、一六七五年二月に通商関係を結ぶ使節官として北京に派遣され、一六七八年モスクワに帰って二部からなる手記を使節局へ提出しました。第一部は旅行記、第二部は中国、アムール、サハリン、日本、朝鮮の情報を含む記録です。この本の五八章による日本についての記録は北京滞在中に得た事があきらかです。[4] ロシアは清国とのネルチンスク条約（一六八九年）によってアムール流域の支配を阻止され、通商・植民政策の方向をカムチャッカに転じました。

十八世紀に入るとロシアにおける日本情報は日本人漂流民から直接聴取する時代になりました。その当時、日本では鎖国政治が強化されていました。

三、ロシア初の日本情報を伝えた漂流民

ロシアで記録された最初の日本人漂流民はデンベイ（伝兵衛）です。カムチャッカを初めて征服したコサック五十人隊長ウラジーミル・アトラーソフ（Владимир Атласов）はカムチャッカ探検を行ってその半島の南部のカムチャダール人部落を制圧しました。その折に、イチャ湖畔に漂着して滞在していた「ギリシア人のような囚人」の消息を伝え聞いて、その「囚人」を訪ね、約二年間カムチャッカで生活を共にします。この間にデンベイはロシア語を習得し、アトラーソフは彼を当時の首都モスクワに連れて行きました。アトラーソフは「第一物語」を一七〇〇年六月ヤクーツク支局に提出しました。

この囚人はウザカ〔大坂〕国の者である。この国はINDO（江戸）の支配下にある。[5] 一七〇一年二月モスクワのシベリア局に「第二物語」を提出した。

デンベイ自身がシベリア局で一七〇二年一月に行った「デンベイの陳述」は、日本人がロシア人に直接与えた最初の日本情報です。アトラーソフの「物語」の

最後のページにある記録は（おそらく、日本の原文をロシア人がコピーした）「万九ひち屋たに万ちと本り立半んにすむ伝兵衛」と読めます。大阪の質屋「万九」谷町通り立半町に住むと解釈されます。[6]

アトラーソフのヤクーツクでの記録によれば、デンベイは一六九五年大坂（〝ウザカ〟）から十二隻の船で江戸（〝インド〟）に穀物や高価な商品を積んで向かったが、暴風雨に遇って帆柱を折られ六カ月漂流してカムチャッカに漂着したと記されています。十二名の乗組員のうち三名が「クリール人の農民」に捕えられ、残りは行方不明となり、三名のうち二名は「くさった魚と草木の根」のために死亡していた。デンベイは一六九九年ヤクーツクにおくられ、一七〇一年十二月にモスクワに到着しました。

アトラーソフはデンベイに日本の地理、風俗、宗教などの事について色々な質問を出して記録をしました。

伝兵衛は天地の創造神についても質問された。人々はそれを信じているか、どこで信仰を

行うのか、と言われて、こう答えた。天地の創造神は一年は地上に、一年は天界に住む。ただ人々はこの神を知らない。自分たちの神々を人々はいろいろな名前で呼ぶ。アミダカミ Амида-ками（阿弥陀・神）、トキ Токи（仏か？）ハチマム Хачимам（八幡）、カンノン Каннон（観音）、フド（Фудо 不動）、シャ・カイトヴダイ Ша-Кайтовдай（Шаканіодай＝シャカ・ニョダイ＝シャカ・ニョライ＝釈迦如来の誤記に相違ない）、アミダ Амида、ニョダイ Недай（両方でアミダ・ニョダイ＝アミダ・ニョライ阿弥陀如来）、コージン Коо-жин（荒神）、ジゴ Жиго（Жизо の誤記であろう。地蔵）、ヤクシ Якуш（薬師）、コクロ Кокуро（虚空蔵であろう）、シガチマン Шигачиман（シハチマンとも読める。シ八幡か？）、コボンドイシ Кобондойш（弘法大師）、イシェシメイ Ишешмей（伊勢神明）、アマグ・サモ Амагу-Само（アタゴ・サマ愛宕様か）、オムネグ Омнег（？）。[7]

一七〇二年一月プレオブラジェンスコエ村でピョートル大帝に拝謁しました。

当時三〇歳の若さであったピョートル大帝は彼の語った日本の情報に興味を抱き、一七〇二年四月三、四人のロシア人の子弟に日本語を教えるように命じ、一七〇五年にはペテルブルグに移して日本語の教師に任命しました。デンベイはロ

シア人によって記録された大坂方言の特徴を示す四二の単語を残しています。彼はかなりロシア語を理解していたようですが、自ら書くことまではうまく出来なかったようです。ピョートル大帝の命令によって日本漂流民デンベイは洗礼をうけてガウリエル（Гавриил）と命名されました。彼は日本人としては最初のギリシア正教徒です。

一七〇九年冬に遭難し、一七一〇年カムチャッカ南部のアワチャ湾北方に漂着したサニマ（三右衛門？）は、一七一四年にペテルブルグに送られてデンベイの助手となりました。サニマは紀州の人で、後に帰化してロシア婦人と結婚し一七三四年に死去するまでロシア語を教えていました。残した日本語資料も全く知られていません。今後発見される可能性があるとおもわれます。

なお、一七〇五年にペテルブルグに最初の日本語学校が開設されたという説があります。二十世紀の東洋学者V・バルトリド博士の代表的著作『ヨーロッパおよびロシアにおける東洋研究史』（一九二五年）で否定されているように、この学校の存在を裏付ける資料は今のところありません。日本語学校はゴンザを教師

として一七三六年七月科学アカデミーに付属して設立されました。これがロシア初の日本語学校です。

四．日露交流史におけるゴンザの役割

十七世紀末から始まるロシアのカムチャッカ遠征は、原住民を征服して毛皮を貢納させ、千島・アリューシャン列島開拓を目指すものでした。一六九六年十二月にカムチャッカに派遣されたアトラーソフ遠征隊は現地人部落を制圧し、城砦を築き赤狐の毛皮を徴収しています。

その当時、ロシアはカムチャッカ以南の諸島に興味をいだいていました。一七二六年にヤクーツクのコサック隊長アファナーシー・シェスタコーフ（Афанасий Шестаков）はエカテリーナ一世の命で探検隊を編成し、一七二九年オホーツクに到着し原住民との戦いで戦死しています。彼の息子ワシーリー・シェスタコーフ（Василий Шестаков）は一七二九年九月オホーツクから出港して北千島に向かい、さらにカムチャッカのボリシェレックへ入港し越冬しました。一七三三年

に編成されたシパーンベルグを先遣隊長とするベーリングの第二次カムチャッカ探検隊は、総勢五七〇人に及び、歴史家で地理学者のミュラーや当時学生だったクラシェニーンニコフも含まれています。ベーリング隊長は一七三四年秋ヤクーツクに到着し、一七三五年夏の輪送隊の到着を待って、オホーツクに達したのは一七三六年末です。彼らの目的はカムチャッカにとどまらず、アリューシャン列島とアラスカ、千島列島を経て日本への航路を開発することにありました。

一七三七年六月シパーンベルグは日本沿岸に達し、仙台藩の金華山沖の網地島と房州雨津海岸の津山に上陸し、織物やガラス玉を渡して米、野菜、煙草、漬物を手に入れていました。ロシアの東方開拓には食糧調達だけでなく、船や建物などを造らなければなりません。これらの物資をヨーロッパやシベリアから運び込むと大変な日数と費用がかかります。日本との通商はロシアにはどうしても欠かせない国家的課題でした。このような時期にゴンザたちがやってきたのです。

一七二九年の夏カムチャッカ最南端のロパトカ岬とアワチヤ湾の間に日本船が漂着しました。この船には十七名が乗り組んでいましたが、二人を除いてすべて

コサック五十人隊長シュティーンニコフ（Штинников）に殺されました。しかし、この悪業が知れて彼は死刑となりました。日本船はファヤイキマル（Фаяк-марь）又はワカシワ丸といいます。薩摩の国 город Сацма から米、綿織物、紫檀、半紙、その他を積んで大坂へ向かうところで悪天候によって大海におし流され、六ヵ月と八日間海上を漂流しました。[8]

生き残った二人の内の一人はゴンザという十一歳の少年で、船の舵手の息子、もう一人はソーザという年輩者でした。

二人の日本人は上から命令があるまでカムチャッカの官費で養われました。ついに、『日本人をヤクーツクに送れ』と命令があり、一七三一年ヤクーツクに送られました。[9]

ヤクーツクのシベリア支局がゴンザたちの存在を知った時点から、彼らに対する破格の取扱いが始まります。ヤクーツクの長官はゴンザたちを国費で扶養し、日本人乗組員を襲ったシュティーンニコフの処刑を命じています。モスクワのシ

ベリア庁の命令で駅馬車で案内人と伍長が指揮する兵士を付けて、イルクーツク、トボリスク、モスクワを経て一七三三年夏ペテルブルグに到着し、アンナ・ヨアノウナ女帝の夏の宮殿で女帝の謁見にのぞみました。漂着から四年間に覚えたロシア語を流暢に話すゴンザに、女帝は驚くとともに大いに喜んだことでしょう。

アンナ・ヨアノウナ女帝はゴンザとソーザにギリシャ正教の洗礼を受けるように命じました。洗礼名は、コジマ・シュリツ（Козьма Шулыц）とダミアン・ポモルツエヴ（Дамиан Поморцев）と名付けられてロシア人となりました。この時点で彼らは帰国を諦め、ロシアに骨を埋める覚悟をしました。陸軍幼年学校の修道司祭のもとに通い、ロシア正教を学びました。ロシア正教の教義を学ぶことは、ヨーロッパの文化とロシア人の精神を学ぶことを意味します。一七三五年にはロシア語を学ぶために、アレクサンドロ・ネフスキー修道院に通っています。ここで教会スラヴ語とロシア語文法の基本を習得し、同年十一月に科学アカデミーでロシア語とともにロシアの芸術・文化を学んでいます。同年十二月には科学アカデミーの正職員となり、日給十カペイカを貰う身分となりました。この時ゴンザには科学アカデミーのスタッフとして、日本語を教える任務が与えられたの

です。

翌一七三六年にロシア科学アカデミーは中ヨーロッパにおける最初の日本語学校を開設するように命令しました。二人はアカデミー図書館次長アンドレイ・ボグダーノフ（Андрей Богданов）の指導の下に教師になったのです。

しかしながら、同九月にソーザは死んでしまいました。ゴンザは一人でロシア兵士の子供たちを教えるようになりました。彼は一七三九年までの三年間に教育以外に教科書と辞典など次の六冊の著作をうみ出しました。

① 日本語会話入門《一七三六年》。
② 項目別魯日単語集《一七三六年》。
③ 簡略日本文法《一七三八年》。
④ 新スラヴ日本語辞典《一七三六～一七三八年》。
⑤ 友好会話手本集《一七三九年》。
⑥ Orbis pictus（世界図解）《一七三九年》。

十一歳で故国を離れたゴンザは漢字は数字しか知らなかったので、ロシア文字で日本語を書きました。この記録は重要な方言資料になっています。[10]

教師の仕事と同時に、ゴンザ自身、女帝の命令によって科学アカデミーで勉強にはげみました。[11]

このような業績を可能にしたゴンザは、他の漂流民と違ってロシア語を流暢に話すことができた点でも、特別な才能の持ち主であったことは違いありません。このことは同じ境遇にあったソーザと比較してもあきらかです。ソーザはじめ他の漂流民との違いは、順応し易い適齢にあったことが幸いしたとも言えましょう。私が注目したいのは、ゴンザが知的な基礎となる教育をしっかり受けていたことと、ボグダーノフの導きがあったことです。

ゴンザの才能を開花させたボグダーノフの功績は、故ペトロワ女史も強調されていたように、特筆されるべきです。一から百までの数字は知っていましたが、平仮名も片仮名もむろん漢字も書けない少年でした。彼女自身も述べていたよう

に、ゴンザの業績はボグダーノフとの共同労作と見るべきでしょう。ボグダーノフは当時のロシアでは並ぶ者がないほどの博識の持主であり、チェコの教育学者コメニウスに傾倒する偉大な教育学者でした。教育学者としてのボグダーノフの面目は、ゴンザの教科書と辞典の単語の配列のしかたに表れています。コメニウスを模倣することなく独自の配列をおこなったのです。

一七三六年に日本語学校の開設と同時に、ゴンザの実践的な教育能力の向上を目指して『項目別魯日単語集』を翻訳させ、ロシア語の基本単語を習得させています。次にゴンザが『日本語の会話　戸口の前』と訳した『日本語会話入門』の翻訳にあたらせています。この原書はコメニウスの『開かれた言語の前庭』です。コメニウスが「子どもにとってラテン語をもっと容易に親しみのもてるものにするために」書いた初歩的な会話入門書です。この二著はいずれも日本語学校のテキストとして執筆され実際に教室で使われました。ゴンザは翻訳と執筆の作業が一体となったこのような作業を通じて、ロシア語の基本単語と会話の基礎を習得していったのです。

このようなボグダーノフの系統的な教育計画に転機が訪れます。それは一七三六年九月二九日のソーザの死です。ゴンザはロシア語とともに日本語も習得しなければならなかったのです。ゴンザの日本語の相手はその時四三歳の経験豊かなソーザでした。ソーザの死はゴンザが日本語を忘れていくことを意味します。ゴンザは悲嘆の涙を振り払って、その十日後の十月十日よりソーザが教えてくれた日本語を確かめるかのように『新スラヴ・日本語辞典』の翻訳に猛然と取り組みます。その意味でこの辞典は、ゴンザなりのソーザへの鎮魂の書とも言えるでしょう。

ゴンザはこの辞典の翻訳作業を進めると同時に『簡略日本文法』を執筆します。ボグダーノフの予定では、辞典よりこの文法書の完成が先だったかもしれません。日本語学校の目的は日本語通訳の養成です。そこで『日本語会話入門』に比べれば高いレベルにある通訳のテキストとして『友好会話手本集』を執筆します。

ついでコメニウスの世界初の図解百科『オルビス・ピクトゥス』の翻訳にすすみます。この書物は『世界図会』と呼ばれているように『世界の事物と人生の活

動におけるすべての基礎を、絵によって表示し、名づけたもの』（コメニウス）[12]です。ボグダーノフはゴンザを日本学者としてだけでなく、自分の後継者として、あるいは学者として世界に通用する人物に育てていこうという意図があったのかもしれません。

ボグダーノフの意図を理解し、きちんと応えてくれたゴンザは、ボグダーノフの最愛・最高の弟子だったのです。ゴンザの突然の死は、ボグダーノフにはわが身を剥ぎ取られるような深い悲しみだったでしょう。それは又、ロシアにとっても大きな損失でした。ゴンザたちがロシアで破格の待遇を受け、ボグダーノフとこのような師弟関係を結び偉大な業績を残したことは、日本の誇りであるとともにロシアの誇りです。ゴンザはボグダーノフとその家族や、科学アカデミーに勤務する人々にさわやかな強い印象をいつまでも残したことでしょう。ゴンザは日露交流の偉大な先駆者だったのです。

ペテルブルグ生まれのドイツ系ロシア人、アッシュ（一七二九―一八〇七）がゴンザの資料を入手し、母校のゲッチンゲン大学図書館に寄贈して保存していま

す。アッシュはロシアの高官であるとともに有名なコレクターでもありました。ゲッチンゲン大学のアッシュ・コレクションからゴンザの執筆であると突きとめた村山七郎は、この資料をアッシュはイルクーツクで入手したのであろうと語っています。ゴンザ以降に漂着した日本語教師たちは、ゴンザの業績に深く感服し、大いに励まされたことでしょう。

一九九四年に鹿児島において、ゴンザファンクラブが結成されました。参加者はクラブの会報や会議でゴンザの作品と鎖国時代の日露関係史の研究を進める重要な活動を行なっています。

五．日本語学校のイルクーツクへの移転

一七三九年十二月にゴンザは亡くなりましたが、ロシアの日本語に対する興味は変わることなく続いていました。そのため日本語学校はサンクト・ペテルブルグにも二五年間存続していました。日本人の教師はいませんでしたが、ボグダーノフとこの学校の最初の卒業生であったシェナヌイーキン（Петр Шенаныкин）

とフェーネフ（Андрей Фенев）が教えていました。ときおりサンクト・ペテルブルグに日本漂流民が送られてきました。一七四七年にはヤクーツク市に新しい日本語学校が創立されました。一七五四年にサンクト・ペテルブルグとヤクーツク両学校はシベリアの主要都市イルクーツクへ航海学校の一部分として移転しました。

移転の理由は当時の経済状態にありました。カムチャッカ、アリューシャン列島、アラスカ等の新領土で活動したイルクーツクの裕福な商人と企業家は国際貿易に興味をもちました。大熊良一氏が書いたように十八世紀に

南進をはばまれたロシアは、シベリア北辺を東漸してカムチャッカを征服支配するのであるが、かくして、ロシアの探検航海者たち（ベーリング、シパンベルグ、アトラソフら）によってカムチャッカから北太平洋海域、アレウト列島、アラスカ、北アメリカ大陸の西北太平洋岸へのロシア人の冒険的毛皮商人の進出となるのである。そして、これらロシア人と日本人の接触は、東蝦夷地のアイヌ人と交易が行われていたのを介して行われるようになる。ロシア船が十八世紀の末葉に国後〔クナシリ〕島や択捉（エトロフ）島にくるの

は、毛皮を求めるロシア人の商社の出先機関が、千島アイヌ人やカムチャダール人の情報をもととして日本人との交易を求めてきたものであると考えられる。[13]

日本語ができる人間は国際仲介者になる可能性があったことが分かります。

その当時、日本漂流民の大部分は洗礼をうけ日本姓名の代りにロシアの姓名を貰いました。

イルクーツク学校初級に関しては、どのような日本語教科書と辞典が使用されていたのか、よくわかりません。サンクト・ペテルブルグの日本語学校の伝統を継承したのか、シベリアの学校は教材を十分に供給されていたのか。ゴンザの教育資料がサンクト・ペテルブルグにおける科学アカデミー古文書館に保管されているだけで、詳細は不明のままです。

注意すべきことは、様々な漂流船は日本の各地の港から出港していたので、乗組員は色々な方言を使っていました。すなわち、南部、伊勢州の出身者は薩摩出

身のゴンザの記録をつかうことができなかったのは明らかです。

六．タターリノフの『レクシコン』

一七七二年、サンクト・ペテルブルグ科学アカデミー会員ドイツ系科学者ゲオルギ（Johann Gottlieb Georgi, 一七二九―一八〇二）は旅行中イルクーツクで利八、伊兵衛、久太郎、長助並びに久助と会って日本語学校並びに日本国のことを質問しました。そしてその記録（一七七二年のロシア国旅行）[14]を一七七五年に出版しました。

この学校設立の動機となったのは十八名がのり込んでいた日本船である。この船は米、布等を積んで日本のサイマチから別の湊に向かって出発したが十二月二九日にマストと帆柱を失い千島のオネコタン島に漂着した。

生き残っていた十二名をカムチャッカに連れていった。彼等はペテルブルグにおくられロシア語を学び、後イルクーツクにおくられて来た。日本語教師になった。

一七八二年十月二四日にロシア科学アカデミー会議はイルクーツクの日本語学校の卒業者アンドレイ・タターリノフ編『レクシコン』（「すなわち日本語でニポンノコトバ、伊呂波と数字…」）を調査しました。編者の事は写本の表紙に平仮名で次のように書いてあります。「にぼんじんのひと、さのすけのむすこ、さんばちごさります」。サノスケと言う日本人はタナ丸の乗組員の一人です。

タナ丸は様々な食料品を積んで、一七四四年末南部佐井湊を出港して江戸に向かいました。太平洋で台風にあい、六ヵ月以上漂流して千島の第五島であるオンネコタン島に漂着しました。十七人の乗組員中生き残った十人はロシア人たちに見出され、カムチャッカ半島のボリシエレツク港、それからシベリアにつれて行かれました。彼らの中から五名が選ばれサンクト・ペテルブルグに送られました。[15] サノスケ等はロシアに滞在中、洗礼をうけロシア女性と結婚しました。サノスケの正教名はイワン（Иван）です。

さんぱち（アンドレイ）編『レクシコン』はゴンザの記録と違って三つの部分にわかれています。すなわち、九七七のロシア語単語とロシア字で書いた日本語

翻訳並びに平仮名で書いた日本語です。タタリノフは、東北弁をつかいました。例えば、「広い」は《fiai》、「とまる」は《ogu》、奉公は《fogo》になっています。『レクシコン』には単語以外、同三部の日本会話と伊呂波（平仮名並びにそのロシア文字で書いた発音）と数字の部分が含まれています。

恐らく、その当時、イルクーツク学校の生徒は『レクシコン』を教科書として使ったことでしょう。もっともこの辞典が出版されたのは一九六二年になってからです。[16]

七．大黒屋光太夫等

漂流民として一番有名なのは日本でもロシアでも、大黒屋光太夫（一七五一―一八二八）であることは言うまでもありません。

天明二年末伊勢州白子浦から江戸に向かって千石積の「神昌丸」という船が出ました。数年後、江戸時代の学者桂川甫周は次のように書いています、

天明二年壬寅の歳十二月、勢州亀山領白子村の百姓彦兵衛が持たる船神昌丸に、紀伊殿の運米五百石並江戸の商賈等へ積送る木綿、薬種、紙、饌具等を積載せ、船頭大黒屋光太夫以下合船十七人、同十三日の巳の刻ばかりに白子の浦を開洋し、西風に帆を揚て夜半ころに駿河の沖に至りしに、俄に北風ふき起り西北の風もみ合て忽柁を摧き、それより風浪ますます烈敷、すでに覆溺すべきありさまなれば、船中の者ども皆々髻を断、船魂に備へ、おもひ〳〵に日頃念ずる神仏に祈誓をかけ、命かぎりに働ども、風は次第に吹しきり…

神昌丸の漂流は七ヵ月間になりました。漂流中に乗組員の一名は死亡しました。そして一七八三年七月二十日、アリューシャン列島中のアムチトカ島に漂着しました。アムチトカ島、カムチャッカ半島、ヤクーツク市それからイルクーツク市に滞在中に十一名が病死しました。

イルクーツクに到着したのは一七八九年二月七日のことでした。同市滞在は二年間。滞在した神昌丸の乗組員は大黒屋光太夫（幸太夫とも書く）、小市、磯吉、新藏、庄蔵でした。五名の希望は帰国でした。けれども鎖国下、彼等の希望をみたすことはほとんど不可能でした。しかしながら通商・国交を求めるイルクーツ

クの裕福な商人の興味により漂流民の希望はかなえられました。

ロシアにおいて、十八世紀末に魯米会社が創設されました。国際貿易の拡大は疑いのない事になりました。その当時、光太夫らは有名な学者キリル・グスタヴォヴィチ・ラックスマン（Кирилл Густавович Лаксман）と知り合いになりました。漂流民らの窮状を知ったラックスマンは何くれとなくかれらのうしろ盾となり、帰国嘆願書を作成してやったり、衣食の不足を補ったりなど親身になって世話をしました。三度におよぶ帰国願も梨の礫なのを知った彼は、嘆願書が途中で握りつぶされて中央当局の手に届いていないと見抜きました。折よく彼は勅令を受けて上京することになっていたので、光太夫を促し、彼をつれて上京しました。[17] 一七九一年一月十五日にイルクーツクから出て、昼夜兼行、三十日あまりでサンクト・ペテルブルグに到着しました。

イルクーツクとサンクト・ペテルブルグ滞在中、光太夫らは自ら進んで日本国の知識（国家機構、地理的位置、風俗、言語など）をロシア人に伝えました。

現代ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支部の写本部にいわゆる光太夫文庫が保存されています。

一、『新板絵入源平曦（あさひの）軍配』
二、『森鏡邪正録』
三、『絵本写宝袋』
四、『番場忠太紅梅箙』
五、『奥州安達原』
六、『攝州渡辺籔橋供養』
七、『太平記』

この文庫が、初めて私の手に入ったのは一九五六年のことでした。その当時レニングラード大学を卒業して日本の写本と木版本の目録を作っていたのですが、ある本の珍しい書き込みに気づきました。

『森鏡』の裏表紙にロシア文字をつかい、次の書き込みがある。

Японщу даикокуя Кодаю // коно хонва ханнозя наи каки // тига каи танозя. Соресоре коно // хонва 小浜諫 токужидони тимайно хонто // каете каити кита. Мина 海Е отосите // 此 хон бакари нокорита й сацу монюде // йомунони таиоринай хокани хонга // аритемо намитага кобориги домо іомарень

（ヤポンツダイコクヤコダユ、コノホンハハンノジャナイカキ、チガカイタノジャ。ソレソレコノ、ホンハ小浜諫トクジロニチマイノホント、カエテカイチキタ。ミナ海エオトシテ、此ホンバカリノコリタイサツモノデ、ヨムノニタイオリナイホカニホンガ、アリテモナミタガコボリチドモイオマレニ）。

ロシア文字中三ヵ所に漢字がありました。右の書はペンで書いたものであって、漢字の書体はロシア字よりまずいものです。同書物にある筆で書かれた漢字はうまく出来たものと見えます。光太夫文庫の書込みの著者は少なくとも二人いました。さらに光太夫自身も漢字・仮名・ロシア文字で書いた形跡があります。

龜井高孝氏は右の書きこみを詳しく調査し、漂流以前とロシア滞在中の光太夫自身の生活をあきらかにしました。[18]

数年間、ロシアの様々な状態に住んでいて、光太夫らはその国の人々・風俗・シベリア現地住民・言語・文字・食物・衣服・宗教・芝居・軍隊・国家機関・歴史・国際関係などを次第に理解していきました。帰国後ロシアに対するさまざまな質問にこたえました。

事実は小説よりも奇なり。サンクト・ペテルブルグ滞在中驚くべきもののうちエカテリナ二世女帝に拝謁を許されたのはその一つです。

女主の左右には侍女五六十人花を飾りて囲繞す。其内に崑崙（くろぼう）の女二人交り居しとぞ。又此方には執政以下の官人四百餘員両班に立わかれて、威儀堂々と排居たれば心もおくれ進みかねたるに、ウヨロンツヨーフ[19]御まえ近く出よと有ける故、氈笠（けおりのかさ）を左の脇にはさみ拝せんとせしに、拝するに及ばず直に出よと有により、笠と杖とを下におき、御まえににじりより、かねて教えられしごとく左の足を折敷、右の膝をたて、手をかさねてさし出せば、女帝右の御手を伸、指さきを光太夫が掌の上にそとのせらるゝを三度舐るごとくす。[20]

光太夫ペートルボルグに在留のうち、執政ベスポロック[21]とりわけ懇にて常に出入す。食事

の時なとは妻子とも樣をおなしくせしとなり。[22]

此方の事など尋ねられ、和書並彼方にて作りたる此方の記事の書なんどを見せらる。和書といふは多く絵草紙院本なりしとぞ。[23]

エカテリナ二世の拝謁の結果として幸太夫・小市と磯吉は帰国した。一七九二年に、初めて日本に国交を求める使節が派遣された。使節の手紙に『偉大なる全ロシア帝国女帝陛下は、至高の母性と人類の福祉に関する一視同仁の見地から、漂流民たちに保護を加えるべく、大ロシア帝国陸軍中将イルクーツク県およびコルヴィヴァン県総督にして数々の叙勲章を受けたるイワン・アルフェリエヴィッチ・ピーリにかんして、前述の日本帝国臣民が日本の近親者および同胞に再会するように彼らの祖国に送還することを命ぜられた。』

光太夫等はロシアに滞在中日本語関係の助言を与えて、顕著な足跡を残しました。残念ながら小市は寛政五年（一七九三年）四月二日に故郷を外から見てロシアの「エカテリナ号」で病死しました。残りの光太夫と磯吉は日本人としてはじ

めてロシアから帰国しました。

当時のロシアには、上記のゴンザの教育資料とタタリノフの『レクシコン』以外、日本語の単語をふくんだ印刷作品もありました。すなわち、一七七二年に六九単語を記録したゲオルギの『ロシア国旅行記』[24]並びに二八五単語をふくんだパラス（Петр Симонович Паллас, 一七四一―一八一一）の『欽定全世界言語比較辞典』（一七八七―一七八九年）。[25]一七九〇―一七九一年出版の四巻のヤンコヴィチ・デ・ミリエヴオ（Федор Иванович Янкович де Мириево, 一七四一―一八一四）の『アルファベット順に配列された全世界言語方言比較辞典』です。[26]

この辞典の第四巻六一四～六一八頁に日本語資料が掲載されています。最初に次の記録があります。

一七九一年にサンクト・ペテルブルグに滞在した日本の伊勢国白子町出身でロシア語を話せた日本人商人コダユは下記の日本語単語の正確な発音と表記とを示した。

日本語単語の数はパラス比較辞典と大体同じです。けれども、ヤンコヴィチ・デ・ミリエヴォ比較辞典の特質は伊勢弁にあります。

桂川甫周は、大黒屋光太夫から長い間色々な話を聞いた結果、ロシアについて様々な作品を出しました。そのうち一番有名なものは『北槎聞略』といいます。光太夫自身は江戸時代のロシアについての最も権威あるコンサルタントでした。

八. 新藏著日本語教材

大黒屋光太夫らが帰国した時、同船の乗組員の二人は帰化する道を選びました。すなわち、その当時病気になった若松村出身の庄蔵と同村の新藏です。『北槎聞略』に書かれている通り

右両人は病気にて彼邦の教法を受、姓名を改、イルコツカに止り居る。[27]

二人ともイルクーツク日本語学校の教師になりました。

サンクト・ペテルブルグのロシア民族図書館にこの日本語学校の一八〇九年の写本教科資料一冊が保存されています。著者名はニコライ・ペトロヴィチ・コロティギン（Николай Петрович Колотыгин, ?—一八一〇）で、即ち漂流民新藏の洗礼名です。通説では「神昌丸」の水夫であった新藏は仮名文字位しか読めなかったということになっています。教科資料の書体も興味深い事実を示しています。

仮名表の後『江戸京の記述付その河・町・橋・堀割情報』があります。それぞれの地名は四行からなります。すなわち地名の意味〔直訳〕、ロシア文字で書いた日本語の発音、平仮名、漢字、片仮名書体です。

それにもかかわらず平仮名書体は片仮名と違っています。例えば

「Коренная улица хончоо

хон чоо

ほんちょう

本町
モトマチ」
「Межевая улица
Сакаи чоо
サかいちょう
堺町
サカイマチ」

次章『全日本国の記述』は次の文句から始まります。

「Хитоцу нит поппо куни ни те нанацуни вари цуке гоза соорое
一、日本国而七ツ割附御座候
ヒトツ、ヒノモトコクニテナンツニワリツケゴサソヲロ」

旧国名は次のように解明されています。

「Хигаси нохоо ните наńбу цутару маттмае
ひがしほにてなんぶうつがるまつまえ
東保ニ而南部津軽松前
ヒガシホニテミナミコヲリツガルマツマエ」

次章『生紳女祈祷と旧約聖書のロシア語へ通訳』に祈祷は次の様に翻訳されています。

「хотоке самага, ньмаре ма суру, мусумего, іо̂рокоба насари масей,
ほとけさまがんまれまするむすめごよろこびなされ
仏様生マスル。娘子。悦成。」
арига такіи, котоде го зари масуру, мария,
ありがたひことでごいざりまするまりや
хотоке самава, омаини, уцукуси кирей нару, омаи
ほとけさまハをまいにうつくしきれいなるをまひ
仏様ヲマイニ。美麗稜鳴。ヲマイ

ホトケサマヲマイニミカルハシアヤメイ

niôboошу, уцукуси киреи нару, таинаино кодань

によぼふてゆうつくしきれひなるたひなひのこだん

女房房しゅ。美麗稜鳴。ハ腹内子胤

オンアつサシユミカルハシアヤメイハラノコヲイン

соо сите, хотоке самага, мумарь масуру,

そうしてホトけさまがんまれまする

そして。仏様加。生満数る。

ソシテホトケサマガンマレマスル

ватакуси домоно, тама синь

わたくしどものたましん

私共ノ玉心

トモキヨリコこロ」

新藏の教育資料をタターリノフの『レクシコン』と比較すると、イルクーツクの日本語学校における教授レベルは二十五年間に高くなった事があきらかになり

ます。平仮名以外片仮名、変体仮名、漢字が学習計画に加わっています。日本の地理と経済上の情報も入っています。右の資料は漂流民の思い出だけでなくて、当時のロシアにあった日本語、オランダ語、中国語並びに日本版地図からとられています。

この資料の書体は同一ではありません。漢字は筆で書かれてあります。その（黒）墨は時を経ても色あせていません。漢字とは異なって、仮名文字はペンで書かれてあります。片仮名は赤茶けた色に見えます。その書体は平仮名と違って下手なので新蔵の死後、学生の誰かが書いた文字だと思われます。さまざまな間違いもあらわれます（「あさくさ」の代りに「ああさくさ」、「しながわ」の代りに「しながな」、「難波」のかわりに「何和」、「コ」のかわりに「ヤ」、「サン」のかわりに「マン」などがかいてあります）。著者の教育程度は日本の地名並びに歴史用語（高砂、住吉など）の間違った理解の原因になりました。

新蔵の教科資料によくあらわれるまちがいは漢字（下手な草書と行書）または平仮名文字の書き方です。古文書の字形の点から見るとイルクーツク学校で習慣

になっていた異体字のことがあきらかになります。ロシア文字による日本語表記の統一が守られない場合もあります。

全体に見ればこの教科資料はいくつかの特徴をもっています。まず、新蔵の日本語音声構造のロシア文字による表記はかなり不正確なものです。つぎは、ロシア宗教用語の翻訳の特質です。新蔵は十六世紀のキリシタン宣教師の経験を知らなかったので宗教用語の翻訳を自分自身で考えだしました（たとえば、神と偶像と至聖生女の意味で「仏」、「木や石や土ノほとけ」、「仏様生マスル娘子」としています）。

大槻玄沢・志村弘強編『環海異聞』（一八一〇年）に書かれているとおり

新蔵、日本学はいろはより仮名書位出来候様子に候得…

同意見は現代の日本・ロシア・アメリカの歴史家による、イルクーツク日本語学校の研究の成果によって通説になっています。この教科資料によって判断する

と、現実はもっと多様であったことが明らかになっています。

十八世紀の終わりに日本語学校が航海学校からイルクーツク古典中学校へ移されたことはその教育水準が向上したしるしです。一般にロシアの古典中学校のレベルは航海学校よりはるかに高いものだったからです。

一八一六年にイルクーツク日本語学校は閉鎖になりました。おそらくそのせいで学校の資料は県立古文書館に移管されました。残念ながらこの古文書館も一八七〇年代の大火事で燃えてしまいました。それにもかかわらず学校の教育資料の一部が（新蔵の教科を含めて）イルクーツク市外に残っています。将来その他の教育資料が発見される可能性に希望をいだいています。

十．宮城県出身者の思わぬ出来事

寛政五年（一七九三）の十一月二七日に仙台材木を積んだ若宮丸は江戸へむかって石巻港を出港しました。その日には風がなかったのが、間もなく西風が吹

き始め、船は陸と反対の方へ流されてしまいました。段々波が荒くなり舵を吹き折られ、大風が帆柱を倒しました。二日後積んでいた米の半分を海中にすてています。船が危なくなったのです。それから、長い漂流が始まりました。百六十日を漂流した後、寛政六年五月十日の朝はじめて、「乗り船からはるか向こうに、船のようなものを見つけ、よく見定めたところ、大変小さな島であった」。

若宮丸の水夫達は最初、

「これまで海上を漂流している間は、蝦夷や松前の方へ流されているとばかり思っていたのに、時ならぬ雪の積った山を見かけたので、これは日本の地を離れた異国であろうと、はじめて思ったのである」。『環海異聞』

その後、この地はロシア領北太平洋のアリューシャン列島のアッカ小島であることが明らかになりました。その小島に到着して若宮丸が沈み、船頭平兵衛が死んでしまいました。大島幹雄の意見では「平兵衛亡きあと、リーダーシップをとる者がいなかったことがうかがわれる。おそらく、平兵衛が生きていれば、自分

か、もしくは一番頼りになる人間を選んだうえで、他のメンバーをくじで決めたように思える」。[28] 生き残った十五人は翌寛政七年、船でカムチャッカ半島を経由、八五日間かかってアジア大陸に上陸しました。漂客はアリューシャン列島のアッカ小島に十ヵ月余り留って、翌一七九五年六月下旬本国のオホーツクという湊に着岸しました。仙台漂流民は大陸にロシア人と共に数千キロメートル、ヤクーツクとイルクーツクまで踏破したことがあり、珍しいものを色々見せてもらっています。

ここには馬がいないので犬をもっぱらつかっている。
この土地は雪が多く積る土地であるから、もっぱら雪車（そり）を用い、薪水の類をはじめ何でも積み、冬になれば海陸ともに数匹の犬にひかせる。『環海異聞』

漂流民は三組にわけられ（すなわち寛政七年八月十八日・寛政八年五月上旬・同年七月三日）馬でオホーツクから出発して翌八年の始めにイルクーツクに着きました。石巻を出港以来三年一ヵ月がすぎていました。この間ヤクーツクで腫れ物の病気のため市五郎が死んでいます。イルクーツクへ到着して、同行者はその

地に七年三ヵ月の間、暮すことになりました。漂流民の大部分は国へ帰りたかったことは言うまでもありません。けれども、その当時、帰国の可能性は皆無でした。

イルクーツクには新しい仲間たちがいました。そこで十八世紀の八十年代に新藏・庄藏（Федор Степанович Ситников）だけでなく、以前の日本漂流民の子孫もすんでいたので若宮丸の乗組員と知り合いになりました。日本語学校も盛んでした。

日本通詞役はエコロ・イワノイチ・トコロコフといった。この人ははじめは町内村方の間打（けんうち）の役（検地割）を勤め、七十五枚の俸給であったという。先年勢州の光太夫らが送られてきたことがあってから、日本通詞役を申しつけられた。これはこの時よりも五、六十年も以前に、南部（藩）の田名部のあたりから漂流し、この地に永住することになった何某といった者がいた（イルクーツクの墓所に竹内徳兵衛と彫りつけた石塔があった。また享保十年何々と彫った日本字の石塔もあった。これらの類であろうか。思うに光太夫の記にある田名部の辺、佐井村の久助という者だそうである。また思うに南部の奥部竹内徳兵衛の手船が延享某年に漂流してロシアに至り、留まったものと見える。久助とかいうのはこ

の人数のうちであろう。竹内の実記は別にある)。その人について十二歳から十七歳まで日本語を習ったことがあった。その後放置しておいたけれども、少々覚えていたので、通訳に申しわたされて光太夫を送る船に乗組み、去る子年(一七九二)松前まで来たそうである。(環海異聞)

イルクーツクではロシア政府から食費の支給を受け、あとは様々な仕事などで収入をえました。善六と辰蔵がまずロシア正教徒になりました。

十一. 世界一周航海

仙台難民はシベリアに八年間住んでいました。その当時は帰国の事を考えなかったようです。ところが思いがけないことに、一八〇三年三月のはじめに、イルクーツク奉行の家にそろって出向くようにとの命令がありました。奉行所で明らかになったのは、都府から飛脚の役人が一人到着し、出来るだけ早くロシア首都であったサンクト・ペテルブルグまで上京するように伝えたそうです。

石巻漂流民十三人は新藏・役人某一人の案内で数千里の道を踏破しました。

イルクーツクの町をはなれ、川を渡り、その向うに車馬が引き揃えてあった。役人は先頭の車にのり、一同を乗せてつれて行った。車は二人乗りで、数は七つ。一つの車に四頭の馬である。…一つの車は三人乗りか。ただし役人は一人乗りで都合八車となる…『環海異聞』

ところが道の悪いシベリアを一日百キロも旅したおかげで、四月末には帝都サンクト・ペテルブルグへつきました。約七千ロシア里の全行程を四十四日間で通過しました。帝京に十四・五日間逗留して、様々な見物をして、国王アレクサンドル一世に拝謁を仰せ付けられました。

その当時、ルミャーンツェフ公はアレクサンドル一世に二つの上申書を提出しました。すなわち、一・「日本との貿易について」、二・「広東との貿易について」。二のアイデアは魯亜株式会社の活動家が教唆したものです。

…帝王もまた近寄られて、直接に問われたことは、あなた方は本国へ帰りたいかと仰せられた。いずれも畏(かしこま)っていると、ガラフが傍から言ったことは、陛下におかれては、あなた方が帰国するのも、ここに止るのも、無理には仰せつけられない。思う通りお受け申し上げお答えするようにとのことであった…津太夫、儀平、左平、太十郎の四人は何とぞ本国へ帰朝いたしたく、お願い奉ります。十年ほども他国におり、ひとえに帰国いたしたいと思いますと答えた…『環海異聞』

結局、津太夫等四名の漂客はロシアの使節船ナジエジダ号でバルチク海のクロンッシュタット湊から出港して、地球をぐるりとめぐっていたのです。デンマーク・イギリス・カナリア島・ブラジルに到着して、南米大陸を回って、マルキーズ諸島・カムチャッカ半島にとまって、長崎に入湊しました。漂流民たちの十一年振りの帰国でした。日本人として初めて世界一周航海をおこなったのです。石巻港をでてから約十一年たったのです。太平洋・大西洋・アメリカ・アジア・ヨーロッパ・アフリカ大陸を自分の目で見、帰国の道を選んだ四名と共にレザノフ使節も日本へ出発しました。ナジエジダ号は一年二ヵ月あまりかかって長崎へつきました。

日本との交易をしようとした第二回遣日使節のレザノフが、いわばロシア政府の息のかかった国策会社といえる毛皮会社の魯米会社（ロシイスコ・アメリカンスカヤ・コンパニヤ）とも関係があったということからしても、ロシア政府が日本に関心をもつにいたった契機がわかる。つまり、その根底に毛皮貿易を基調とし、さらに十八・十九世紀の時代における西欧の植民地主義国家が、国策的植民地会社（東インド会社など）を設けて東洋や東南アジアに進出してきたのにならって、ロシア政府じたいも、毛皮貿易を中心として国策会社を設けるにいたったものと見るべきである。[29]

ナデジダ号が三月二十日長崎を出港した後に、仙台の漂流民の四名は長崎奉行所に呼び出されました。四十日間以上にわたって大槻玄沢の質問に答え、鎖国時代の世界についての知見を述べました。大槻玄沢の作品の名前は『環海異聞』であります。その諸本は江戸時代に有名になりました。

十二、善六の日露関係の役割

仙台の漂流民たちがオホーツクからヤクーツクまで行った時、善六がロシア正

教の洗礼を受ける予定にしたらしい。帰化するのはイルクーツクに到着してから二ヵ月後の事でありました。この後、善六はピョトル・キセリョフ(Петр Киселев)と名乗っていました。後でイルクーツクの日本語学校の教師でもあって、時々通訳者の仕事を引きうけて、貿易をもしました。

レザノフはロシアから出発して、帰国の道を選んだ漂流民の四名と共に善六を選びました。使節の決定の理由は善六の通訳としての高い水準でした。けれども、レザノフの意見は変わりました。その変化の理由は使節の手紙に次ぎの様に説明されています。

『通訳書記官として私が預かっていたキセリョーフをイルクーツクに戻すことにしました。彼はきっとイルクーツクの日本語学校のために役に立つでしょう。彼の行動はいつも称賛に値するものでした。しかし他の日本人たちが、キセリョーフが洗礼を受けたことで、彼に対して憎しみを感じ、彼が罰せられるであろうと呪うのを見て、私は彼をロシアに残すことにしました。私にしてみれば、必要な人間がいなくなってしまうのがとても残念でしかたがありません。私はニコライ・ルミャンツェフ伯爵に対して、キセリョーフがこの一

年間、私のために精一杯働いてくれた報酬として、二百ルーブルを支払ってくれるようにお願いの手紙を書きました』[30]

日露関係における、善六の役割はたかく、大黒屋光太夫の役割と比べる事ができます。彼の子孫ディミトリイ・キセリョフは昭和三年に函館ソ連領事になりました。彼は子供時代に善六の運命についての話を聞いた事があります。

十三. 日本語の方言

ロシアの領土に漂着した日本漂流民は様々な藩の出身でありました。田舎の水夫で、日本の標準語を話すことができず、ロシアの日本語学校の教師として慣れた方言の言葉をつかいました。すなわち、ゴンザの資料には薩摩方言があらわれます、

さんぞう（心）—うぐゆす
たくさん（沢山）—たくせ
まゆ（眉）—めのけ

タタリノフの辞典には南部の方言があらわれます、

おまえ—おまい

ひとつ（一）—ふとつ

うさぎ（兎）—うさんぎ

ふくろ（袋）—ふぐろ

新藏の教育資料に伊勢方言があらわれています、

はは（母）—ふぁふぁ

くち（口）—くじ

おまえ（お前）—おまい

した（下）—ひた

漢字・仮名で書いた言葉の発音は分かりにくいものであります。この理由でロシア文字で書かれた言葉は方言学者の資料として価値の高いものであります。

1 平成十一年第五十一回正倉院、奈良国立博物館、八頁。
2 山下恒夫編、『石井研堂コレクション江戸漂流記総集』第六巻、日本評論社一九九三年、七八頁。
3 高野明著、『日本とロシア』「精選復刻紀伊國屋新書」、東京、紀伊国屋書店、一九九四年、一六頁。
《Козмография 1670. Книга, глаголемая Козмография, сиречь описание сего света земель и государств великих》, СПб., 1878-1881.
4 Спафарий Н.Г., Описание первыя части вселенныя, именуемой Азии, в ней же состоит Китайское государство с прочими его городы и провинции, Казань, 1910.
5 村山七郎著、『漂流民の言語』、吉川弘文館、一九六五年、五頁。
6 高野明著、『日本とロシア』、五四—五五頁。
7 村山七郎著、『漂流民の言語』、一〇頁。
8 村山七郎扁、ゴンザ編、A・I・ボグダーノフ指導。『新スラヴ・日本語辞典』、日本版、ナウカ、一九八五年、七頁。
9 村山七郎著、前揚書、二四頁。
10 現在、ゴンザの教育資料はロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支部の古文書部に保存されている。
11 Иванов П., Распоряжения Петра Великого об обучении в России японскому языку, 《Вестник императорского Русского географического общества》, 1853, ч. VIII, кн. 3, с. 5.
12 Heibonsha Library 129. J・A・コメニウス『世界図絵』、井ノ口淳三訳。平凡社、一九九五年。
13 大熊良一著、『幕末北方関係史考』、近籐出版社、一九九〇年、八～九頁。

14 J. G. Georgi. Bemerkungen einer Reise im Russischen Reich im Jahre 1772. St. Petersburg, 1775, S.2-13.

15 Файнберг, Э. Я., Русско-японские отношения в 1697-1875 гг., Москва, 1960, с. 33.

16 《Лексикон》русско-японский Андрея Татаринова. Издание текста и предисловие О.П.Петровой. Москва, ИВЛ, 1962.

17 桂川甫周編著・亀井高孝校訂、『北槎聞略』、吉川弘文館、一九八九年、一二二頁。

18 亀井高孝、『光太夫の悲恋』、吉川弘文館、一九六六年。

19 Александр Романович Воронцов (1741-1805), 貿易省長。

20 『北槎聞略』、四一頁。

21 Александр Андреевич Безбородко (1747-1799).

22 『北槎聞略』、一二六六頁。

23 同書、四三頁。

24 J. G. Georgi. Bemerkungen einer Reise im Russischen Reich im Jare 1772. St. Petersburg, 1775, S.2-13.

25 P.S.Pallas. Linguarum Totius Orbis Vocabularia Comparativa Augustissimae Cura Collecta (П.С. Паллас. Сравнительные словари всех языков и наречий, собранные десницею всевысочайшей особы), С-Петербург, тт. 1-2, 1787-89.

26 Ф. Янккович де Мириево. Сравнительный словарь всех языков и наречий, по азбучному порядку расположенный. С-Петербург, тт. 3-4, 1790-91.

27 『北槎聞略』、三頁。

28 大島幹雄、『魯西亜から来た日本人、漂流民善六物語』、東京、廣済堂出版、一九九六、三九頁。

29 大熊良一著、『幕府北方関係史考』、近藤出版社、一九九〇年、一一一頁。

30 大嶋幹夫、『露西亜から来た日本人、漂流民善六物語』、一三二～一三三頁。

＊＊＊発表を終えて＊＊＊

四十三年前、鎖国時代日本の写本の大文庫を初めて調査させてもらいました。これは当時のソ連科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部の日本写本コレクションでした。その中で日露関係の資料を四・五点を見つけた事があります。桂川甫周著『北槎聞略』、大槻玄沢著『環海異聞』、ヴァシリィ・ゴロウニン著『遭厄日本紀事』（鎖国時代日本語の翻訳）が目につきました。

数十年間日本古典文学並びに伝統的な文化を研究するなかで、あらゆるロシアの図書館と古文書で初期の日露文化関係の記録を捜してきました。

今年、日文研のお陰で『環海異聞』の翻訳が出来る事になりました。様々な記録の調査を行うなかで江戸時代の日露関係がさらに明らかになりました。

今回の日文研フォーラムの話は調査結果の報告になります。調査をさせていただいた白幡洋三郎先生をはじめ日文研のスタッフの皆様に感謝いたします。

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ（ピサ大学助教授） Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン（日文研客員助教授） Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン（大阪大学助手） Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ（日文研客員教授） Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋　彙七（慶北大学校師範大学副教授） SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト（ウィーン大学教授） Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び－拳を中心に－」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア（テキサス大学助教授） Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像－現実と幻想－」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ（オベリン大学助教授） James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性－恵信尼の書簡－」

⑨	元. 2.14 (1989)	厳　安生（北京外国語学院日本語学部助教授） YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉　敬文（遼寧大学日本研究所副所長） LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ（オベリン大学助教授） Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏　剛（京都工芸繊維大学助教授） HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント（東洋大学助教授） Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ（ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授） KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO.ローターモンド （フランス国立高等研究院教授） Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪　向榮 （中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授） WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント（ミネソタ大学助教授） Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ（フランス国立科学研究所助教授） Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2．1．9 (1990)	スミエ・ジョーンズ（インディアナ大学準教授） Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2．2.13 (1990)	カール・ベッカー（筑波大学哲学思想学系外国人教師） Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2．4.10 (1990)	グラント K．グッドマン （カンザス大学教授・日文研客員教授） Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2．5．8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ （スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授） Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2．6.12 (1990)	リヴィア・モネ（ミネソタ州立大学助教授） Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2．7.10 (1990)	李　国棟（北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師） LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉕	2．9.11 (1990)	馬　興国（遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授） MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉖	2.10．9 (1990)	ケネス・クラフト（リーハイ大学助教授） Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ（カイロ大学講師） Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較」
㉘	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ （カレル大学日本学科長・日文研客員助教授） Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
㉙	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン （ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員） Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト（ワーゲニンゲン大学研究員） Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
㉛	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ （ワルシャワ大学教授・日文研客員教授） Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー（オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授） Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
㉝	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ （ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授） Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント（フンボルト大学教授・日文研客員教授） Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

㉟	3．9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス（琉球大学助教授） Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
㊱	3.10. 8 (1991)	王　曉平（天津師範大学助教授・日文研客員助教授） WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
㊲	3.11.12 (1991)	辛　容泰（東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員） SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
㊳	3.12.10 (1991)	洪　潤植（東国大学校教授） HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
㊴	4．1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン （デリー大学教授・日文研客員教授） Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4．3.10 (1992)	ジャン＝ジャック・オリガス （フランス国立東洋言語文化研究所教授） Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
㊶	4．4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー（プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授） Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4．5.12 (1992)	ポール・マッカーシー（駿河台大学教授） Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4．6．9 (1992)	G．カメロン・ハーストⅢ（ニューヨーク市立大学リーマン広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長） G．Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へ－徳川時代における武芸の発達－」
44	4．7.14 (1992)	杉本　良夫（オーストラリア・ラトローブ大学教授） Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
㊺	4．9．8 (1992)	王　　勇（杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授） WANG Yong 「中国における聖徳太子」
㊻	4.10.13 (1992)	李　栄九（大韓民国中央大学教授・日文研客員教授） LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
㊼	4.11.10 (1992)	ウィリアム D．ジョンストン （米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授） William D．JOHNSTON 「日本疾病史考 －『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
㊽	4.12．8 (1992)	マノジュ　L．シュレスタ（甲南大学経営学部講師） Manoj L．SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 －技術移転をめぐって－」
㊾	5．1.12 (1993)	朴　正義 （圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員） PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5．2．9 (1993)	マーティン・コルカット （米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授） Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間－北條政子と宗教」

⑤1	5．3．9 (1993)	清水　義明（米国・プリンストン大学マーカンド栄誉教授） Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ　L. フリアー　(1854〜1919) とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
⑤2	5．4.13 (1993)	金　春美（高麗大学教授・日文研来訪研究員） KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5．5．11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ（ハワイ大学教授） Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5．6．8 (1993)	姜　希雄（ハワイ大学教授・日文研客員教授） H.W.KANG 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 －科挙制度をめぐって－」
⑤5	5．7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ （ソフィア大学教授・日文研客員教授） Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り － 平安朝文学の特質－」
⑤6	5．9.14 (1993)	金　容雲 （漢陽大学教授・日文研客員教授） KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン （コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授） Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11．9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー （スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授） Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ（ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授） Willy VANDEWALLE 「日本・ベルギー文化交流史 －南蛮美術から洋学まで－」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン （ミシガン州立大学連合日本センター所長） J. Martin HOLMAN 「自然と偽作 －井上靖文学における『陰謀』－」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ（ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員） Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 －俳句の可能性を中心に－」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク （フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授） Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス（オハイオ州立大学助教授） Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ　D. マヒウォ （フィリピン大学アジア・センター準教授） Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14 (1994)	劉　建輝 （中国・南開大学副教授・日文研客員助教授） LIU Jian Hui 「『魔都』体験－文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ　J. クイン （オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授） Charles J. QUINN 「私の日本語発見－王朝文を中心に－」

67	6．9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) Francois MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥⑧	6.11.15 (1994)	賈　蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭　飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦⓪	7．1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心に－」
⑦①	7．2.14 (1995)	厳　紹璗 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦②	7．3.14 (1995)	王　家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦③	7．4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心に－」

⑭	7．5．9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7．6．6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7．7.25 (1995)	崔　吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sung 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑰	7．9.26 (1995)	蘇　徳昌（奈良大学教養部教授） SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑱	7.10.17 (1995)	李　均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「雷神思想の源流と展開－日・中比較文化考－」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑳	7.12.19 (1995)	タチヤーナ　L．ソコロワ＝デリューシナ （翻訳家・日文研来訪研究員） Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8．1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8．2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8．3.12 (1996)	イザベル・シャリエ（神戸大学国際文化学部外国人教師） Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 － 近代批評における新語 －」
⑧4	8．4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8．5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8．6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8．7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール（大阪学院大学助教授） Silvain GUIGNARD 「筑前琵琶 － 文化を語る楽器」
88	8．9.10 (1996)	ハーバート　E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王　秀文（中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授） WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 － 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰－」

90	8.11.26 (1996)	王　宝平（中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授） WANG Bao Ping 「明治前期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨1	8.12.17 (1996)	陳　生保（中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授） CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨2	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー　N. メシェリャコフ （ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員） Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭　永喆（韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授） KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル（スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長） Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨5	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ（カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授） Michele F. MARRA 「弱き思惟 － 解釈学の未来を見ながら」
⑨6	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ（京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授） Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 － なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨7	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ （チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授） Jan SYKORA 「近世商人の世界－三井高房『町人考見録』を中心に－」

98	9．7．8 (1997)	鶴田　欣也（カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） Kinya TSURUTA 「向こう側の文学－近代からの再生－」
99	9．9．9 (1997)	ポーリン・ケント（龍谷大学助教授） Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・グーセン （カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授） Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か－21世紀に向かって」
101	9.11.11 (1997)	金　禹昌　KIM Uchang （韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授） リヴィア・モネ　Livia MONNET （カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） カール・モスク　Carl MOSK （カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授） ヤン・シコラ　Jan SYKORA （チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授） 鶴田　欣也　Kinya TSURUTA（カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） パネルディスカッション 「日本および日本人－外からのまなざし」
102	9.12．9 (1997)	ジョナ・サルズ（龍谷大学助教授） Jonah SALZ 「猿から尼まで－狂言役者の修業」
103	10．1.13 (1998)	姜　信杓 （韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授） KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

104	10. 2.10 (1998)	高　文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者－一休宗純とその文学」
105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン・カイザー（筑波大学教授） Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才－語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ・ジョーンズ (米国・インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie A. JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア・モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間に－金井美恵子の小説における映画的身体」
108	10. 6. 9 (1998)	島崎　博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘　培培 (米国・バッサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか － 詩的イメージとしての典故 －」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ・リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」

㊶	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 「『愛玩』 ― 安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
㊷	10.11.10 (1998)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 「『道行き』と日本文化 ― 芸能を中心に」
113	10.12. 8 (1998)	グレン・フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Glenn HOOK 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
㊹	11. 1.12 (1999)	杜　勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 「『中』のシンボリズムについて－宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 「日本の民主主義－沖縄からの挑戦」
㊻	11. 3.16 (1999)	エドウィン　A.　クランストン (米国・ハーバード大学教授・日文研客員教授) Edwin A. CRANSTON 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化?」
㊼	11. 4.13 (1999)	ウィリアム　J.　タイラー (米国・オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) William J. TYLER 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」

118	11. 5.11 (1999)	金　知見 （韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授） KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟－高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ （モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・日文研客員助教授） Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ－日本の言葉に反映された文化の特徴－」
120	11. 7.13 (1999)	リース・幸子　滝 （米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサルタント・日文研客員助教授） REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
121	11. 9. 7 (1999)	宋　敏 （韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授） SONG Min 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン　ノエル　ロベール （フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授） Jean-Noël A. ROBERT 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
123	11.11.16 (1999)	ヴラディスラブ　ニカノロヴィッチ　ゴレグリャード （ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部極東部長・日文研客員教授） Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
124	11.12.14 (1999)	楊　暁捷 （カナダ・カルガリー大学準教授・日文研客員助教授） X. Jie YANG 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

⑫⑤	12. 1.11 (2000)	エミリア　ガデレワ (日文研中核的研究機関研究員) Emilia GADELEVA 「年末・年始の聖なる夜—西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究—」
126	12. 2. 8 (2000)	李　応寿 (韓国・世宗大学校副教授・日文研客員助教授) LEE Eung Soo 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14 (2000)	アンナ　マリア　トレーンハルト (ドイツ・デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) Anna Maria THRÄNHARDT 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11 (2000)	ペッカ　コルホネン (フィンランド・ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) Pekka KORHONEN 「アジアの西の境」
129	12. 5. 9 (2000)	金　貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) KIM Jeong-Rye 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⓪	12. 6.13 (2000)	ケネス　リチャード (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) Kenneth L. RICHARD 「出島—長崎—日本—世界　憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン(1867—1944)と倉場富三郎(1871—1945)」
131	12. 7.11 (2000)	リュドミラ　ホロドヴィッチ (ブルガリア・ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) Lyudmila HOLODOVICH 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬②	12. 9.12 (2000)	マーク　メリ (国際日本文化研究センター外来研究員) Mark MELI 「「物のあはれ」とは何なのか」

133	12. 10. 10 (2000)	リチャード　ルビンシャー (インディアナ大学教授・日文研客員教授) Richard　RUBINGER 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
134	12. 11. 14 (2000)	辛　容泰 (東国大学校日本文化研究所研究員・日文研客員教授) SHIN　Yong-tae 「日本語の「カゲ（光・蔭)」外—日本文化のルーツを探る—」
135	12. 12. 12 (2000)	蔡　敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) CAI　Dun da 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
136	13.　2.　6 (2001)	バルト　ガーンズ (日文研中核的研究機関研究員) Bart　GAENS 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13.　3.　6 (2001)	ポール　グローナー (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) Paul　S. GRONER 「仏教の戒律とは何か？」
138	13.　4. 10 (2001)	李　卓 (南開大学教授・日文研客員教授) LI　Zhuo 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
139	13.　5.　8 (2001)	エッケハルト　マイ (ドイツ・フランクフルト大学教授・日文研客員教授) Ekkehard　MAY 「西洋における俳句の新しい受容へ」
140	13.　6. 12 (2001)	徐　蘇斌 (日文研外国人研究員) XU　Su bin 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm

＊＊＊＊＊＊＊
発 行 日　2001年6月26日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp/
問 合 先　国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課
＊＊＊＊＊＊＊
©2000　国際日本文化研究センター

■ 日時

平成11年11月16日㈫

午後２時～４時

■ 会場

国際交流基金　京都支部

第一二三回、鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち

ヴラディスラブ　ニカノロヴィッチ　ゴレグリャード

国際日本文化研究センター